

「未来を築く子育てプロジェクト」のご紹介

「未来を築く子育てプロジェクト」は、
3つの募集事業によって、
すこやかな子育てと
夢のある未来づくりを応援します。

エッセイ・コンクール

子育て・子育てにまつわるエッセイを幅広く募集します。地域社会や家族ぐるみで助け合う事例など、子どもが社会性を習得し自立するための創意工夫のある子育てを紹介します。子育ての苦勞を乗り越え、子どもが自立していく過程で、周囲が得る気づきや喜びなどの「子育てのすばらしさ」を伝えていきます。今年も、男女問わず、幅広い年代の方からご応募いただきました。

子育て支援活動の表彰

より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集します。地域の地道な活動にも着目し、ロールモデルとなりうる特徴的な子育て支援活動を表彰しています。価値のある活動の他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育ての不安を払拭します。

女性研究者への支援

育児のため研究の継続が困難となっている女性研究者および、育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するための助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。

第5回

「未来を築く子育てプロジェクト」

2011年事業報告

募集3事業受賞者のご紹介

目次

- 02 「未来を築く子育てプロジェクト」のご紹介
- 03 ごあいさつ
- 04 講評
- 06 エッセイ・コンクール
- 12 子育て支援活動の表彰
- 27 女性研究者への支援
- 32 東日本大震災「緊急支援プログラム」のご紹介
- 34 第4回受賞者のご紹介

ごあいさつ

「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員長



堀田 力 公益財団法人さわやか福祉財団理事長、弁護士

かつてあった「共助」の精神が希薄になり、社会や地域ぐるみで子育てをすることが敬遠されがちな現状に対して、3部門いずれも、人とのつながりの中で子育てをすることの大切さを改めて世に問う選考結果になったと思います。

子育て支援活動の選考では、地域の子育て環境の改善に真摯に取り組んでいる団体を、女性研究者の選考では、育児と研究の両立に向けて今後も邁進していくことのできる高い志を持った方を選ばせていただきました。また、エッセイについては、家族や地域の中での「絆」を描いた作品が強い印象を残しました。子どもを育てる担い手には、家族、学校、地域などがありますが、今回の選考を通して、家族または地域による子育てはこのようにあってほしいという、私たちのメッセージを打ち出すことができたのではないかと考えております。

「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員



横山 進一 住友生命保険相互会社取締役会長

私たち住友生命の創業百周年記念事業として平成19年にスタートさせた本プロジェクトは、今回で5回目を迎えました。内閣府特命担当大臣賞、厚生労働大臣賞に加え、文部科学大臣賞も授与していただけることとなり大変光栄に存じます。

今まで継続して取り組んでまいりました3つの公募事業の他に、今回は3月の東日本大震災の発生を受け、被災した子どもたちのため、急遽、東日本大震災「緊急支援プログラム」を実施させていただきました。震災の影響もあり、従来以上に「子育て」環境が逼迫している現状を痛感しております。住友生命では、これからも「子育て」を応援し子どもたちの未来が明るく強いものとなるように貢献していきたいと考えております。

募集結果

第5回「未来を築く子育てプロジェクト」では、2011年6月から9月までの間、「エッセイ・コンクール」、「子育て支援活動の表彰」、「女性研究者への支援」の3部門の募集をいたしました。「エッセイ・コンクール」には1,177編、「子育て支援活動の表彰」には127組、「女性研究者への支援」には119名のご応募をいただきました。12月中旬に開かれた実行委員会が最終選考が行われ、各部門の受賞者が決定しました。

エッセイ・コンクール

応募数 **1,177** 編
(郵送732 WEB445)

- 内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞/最優秀賞から1編
- 文部科学大臣賞/最優秀賞から1編
- 厚生労働大臣賞/最優秀賞から1編
- 最優秀賞/4編
- 優秀賞/20編

子育て支援活動の表彰

応募数 **127** 組

- 内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞/未来大賞の1組に授与
- 文部科学大臣賞/未来大賞の1組に授与
- 厚生労働大臣賞/未来大賞の1組に授与
- 未来大賞/未来賞から3組
- 未来賞/10組

女性研究者への支援

応募数 **119** 名

- スミセイ女性研究者支援/10名

講評

「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員



池田 守男 株式会社資生堂相談役

「民間や地域が主体となって子育てを支援する」、そんな時代の趨勢を反映した選考になったと思います。子育て支援活動部門では、地域に根差した団体からの応募が多く、「お互いに支え合い助け合うことこそが、地域そして人間のあるべき姿である」という考えが広く定着しつつあることを実感しました。また、エッセイと女性研究者の部門では選考を通じて、子育ての分野には未解決の問題が山積している事実改めて気づかされました。子育ての素晴らしさとともに、そうした育児をめぐる現状や課題を世に知らしめ、心ある人たちの“気づき”を促すこともまた、本プロジェクトの重要な役割であると考えています。



大日向 雅美 恵泉女学園大学大学院教授

研究者を取り巻く環境が厳しさを増していることが、昨年以上に強く感じられました。そのような中であっても、研究と育児をしっかりと両立させている女性研究者の姿には頭が下がる思いがいたしました。今回選ばれた方も過去の受賞者同様に、受賞をきっかけにして家族や大学、地域に認められ、「子どもと共に生きる研究者」として着実に歩む姿を多くの人に示してくださることと期待しております。子育て支援活動部門では、数十年にもわたり地域のニーズに応え続けてきた団体や、そこに暮らす人たちのSOSの声に手を差し伸べるべく立ち上がった団体など、地域が抱える問題に真正面から向き合った団体を選ばせていただきました。



奥山 千鶴子 特定非営利活動法人びーのびーの理事長

子育て支援活動の表彰も今回で5回を数えましたが、全国には、地域に根差した活動を地道に行っている団体がまだまだたくさんあることを再認識させられました。地域の子育てを縁の下で支える団体に光を当てることで、その素晴らしい活動を多くの人に知っていただくことの意義は決して小さくないと思います。

エッセイについては、今回から文部科学大臣賞が新設されましたが、選考に際しては、学校教育だけでなく地域社会を含めた生涯学習の観点を重視しました。今年の応募作品は、同じ「子育て」をテーマにしながらも内容は多岐にわたり、また幅広い世代の方々が応募してくださっている点に、これまで以上の“広がり”を感じました。



金田一 秀穂

杏林大学外国語学部教授

研究の場所や時間を確保することさえままならない厳しい環境にありながらも、今回応募いただいた研究者はどなたも、研究に対する意欲にあふれる方ばかりでした。本プロジェクトによる助成が、そうした研究者の方々にとって、今後も研究を続けていく上での“精神的原動力”になればうれしく思います。そして例年に比べますと、積極的に海外に渡って調査・研究活動を行う、国際感覚を持った研究者が増えたように感じました。また、昨年に引き続き、海外からの留学生による応募も多く見られました。

研究とは普遍的なものです。日本という狭い枠組みではなく、広く地球全体の「未来を築く」ために、この女性研究者支援が役に立てば良いと思います。



吉永 みち子

作家

父親が子どもたちと一緒に子育てを楽しむ様子を描いた作品や、地域の伝統行事への参加を通じて子どもたちが成長していく姿を描いた作品など、これまでにない作風のエッセイが印象的でした。一方で、身の回りの出来事を題材にした作品や内省的な内容の作品が多かった点も今年の特徴です。身近な家族や地域を改めて見直す作品が多く寄せられた背景には、震災の影響もあったと思われる。今回の選考では、身近なところに目を向けつつも、「気づき」や「発見」がしっかりと描かれていた作品を選ばせていただきました。元気なお年寄りや子育て経験者が活躍するエッセイには、日本の子育て環境をより良いものにしていくためのヒントが隠されているように思います。



エッセイ・コンクール

内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞・最優秀賞

子育ての功名争い

田上 直志(栃木県)

「よく見ておくんだぞお。大きくなったらパパみたいに洗濯ものを干すんだからな」

七歳の長男と五歳の次男に言い聞かせながら洗濯物を干す。一歳になる三男の食事介助やオムツ替えの時などは、

「こんなこともパパになったら、しなくちゃいけないんだ。でも、出来るかなあ」

と挑発的な言葉を投げかける。

「うーん。多分出来ると思うけど……」

と二人とも一応は答えてくれる。将来この子たちが父親になった時、家事や育児をどこまでするのだろうか。

「ほーら、元気な泣き声だねえ。いいかあ、赤ちゃんは泣くのが仕事なんだぞお」

三男が泣き叫んでぐずる時、勘弁してくれと思うことがある。けれども、長男たちに聞こえる様に『赤ちゃんは泣くのがお仕事』と口にしては、微笑んでみせる。将来この子たちが父親になった時、泣いてぐずる赤ちゃんを、笑って見守ることが出来るだろうか。

こんな風に、父親だって育児や家事を行い子どもは泣いてぐずる存在だということを伝えている。子育ては楽しい面だけでなく、大変な面もあるということ。そんな私の姿を見て、将来、我が家の子ども達は、一体どんな子育てをするのだろうか。

その答えを垣間見る出来事があった。それは妻が夜勤で不在の晩の日のことだった。

私はいつものように子ども達を布団に寝かせた。ウトウトし始めると三男が夜泣きを始める。一階にかけ降り、ミルクを作ると二階にかけあがり哺乳瓶を与える。これを二度ほど繰り返す。これで安心して熟睡できるはずだった。けれどもこの日は



突然の悲劇が襲ってきた。安心しきって爆睡している私の顔に寝相の悪い次男の足が勢いつけて何発も落ちてきたのだ。寝場所を替え、ウトウトし始めると今度は長男の足が私の腹の上に落ちてくる。こんな事を繰り返しているうちにすでに朝の四時近く。少しでも眠っておこうと再度布団に入ると、計算外の三男の朝泣き。もう動けない。私は頭の中で『子どもは泣くのが仕事』と言い聞かせ、眠りに入る。ところが突然、朝泣きがピタリと止んだのだ。泣かれるのも困るが、何もしてないのに泣きやまれるのも、やはり気になる。眠気が一気にふっとんで、三男を見た。と、そこには両手で長男の顔にしがみつく三男と、両手で三男の体を抱きかかえている長男の姿があった。

この話を、後日子ども達に話すと、長男は覚えていないと言いながらも、手を叩いて大喜びし、次男は手柄をあげられなかった事に地団太を踏んで悔しがっていた。我が家の子育てプロジェクトもまんざらでもないのかなあ。子育ての大変な面を功名争いする子ども達を見て、やんわりと期待をしてみる。

受賞の言葉

三男の夜泣きのため毎日眠りも浅く、寝不足です。ところが最近、夜泣きだけでなく笑い声もあがるようになりました。どんな楽しい夢を見ているのかと考えると、今度は嬉しくて眠れなくなりました。

「子育ては大変な面と楽しい面がある」と本文で書きましたが、少しだけ、この場を借りて訂正させていただきます。「子育ては大変だからこそ楽しい」と。これからも息子たちと共に、子育てを楽しみたいです。

文部科学大臣賞・最優秀賞

「えんぶり」で育つ子ども達

藤田 智恵子(青森県)



青森の県南地方には、八百年の歴史と伝統を持つ「えんぶり」という郷土芸能がある。国の重要無形民俗文化財にも指定される、北国に春を呼ぶ祭りだ。

私の住む小さな町からは、八十歳を過ぎた長老から小学生までが、えんぶり組として二月の祭りに参加する。親方を頭に、舞手達、笛、手平鉦、太鼓、唄い手、旗持ち、それに二十名程の舞子の子ども達が加わり、総勢五十名前後で大変にぎやかに構成される一団。

私の夫も唄い手として一員を務める。成人した我が家の三人の息子達も、子ども会時代は舞子役で参加していた。この子どもえんぶりの練習がまた、寒く厳しい。底冷えの冬場、近所の集会所では毎晩のように指導の熱く荒い声が飛ぶ。低学年の子は「練習行きたくねえ」

と、ぐずぐずリタイヤ寸前になり、上学年の子が、騙し騙し面倒を見ての練習が続く。

けれど、いざ本番晴れ舞台、ぴんと澄んだ空気、大観衆のヤンヤの喝采……苦しい練習が実を結ぶ。出番が終わり緊張が解けた子ども達の笑顔は、誇らしげですがすがしい。

子どもえんぶりを経験し、親元を巣立った三人の息子達は「えんぶりは自分の中の芯」と口を揃える。郷土の記憶は、えんぶりの記憶と重なり、いつもどこかで自分を支えてくれるのだと。帰省の度に息子達は、えんぶり談義に花を咲かせ盛り上がっている。

練習合間での休憩タイムでの、長老の昔話が、今も変わらず子ども達の一番人気。

「おまえのじっちゃん、逃げ足速くてなー」

「おまえの父ちゃんは、悪ガキ鼻たらし」

白髪頭を取り囲み、子ども達はガラガラ腹を抱える。そして話は町の成り立ち、歴史に及ぶ。昔

の学校、人々、田んぼの姿……。時代のタイムスリップに、子ども達は目を輝かせる。「町の昔と今」を紡ぐ話に、皆がひとつになり共有する豊かな時間がそこにある。

秋も終わりのある日、えんぶり組の中心となる高校一年生の男の子が、学校を辞めたという話が伝わってきた。理由があつてのことだろうが、自宅にこもっているらしい彼を皆で案じた。えんぶり練習まで、あと一カ月。果たして彼は、練習に来てくれるだろうか…。

練習初日、周囲の心配をよそに、彼は遅れず集会所にやって来た。いつもより、ぎこちない笑顔。けれど、すぐに仲間の輪に加わった。そして、練習に一日も休むことなく通った彼は、祭り本番終了後、思いの丈を夫に語ってくれたという。自分は定時制高校に通いながら働くことと決めたこと、えんぶりが自分の居場所だったこと、地域の為に役立つ人間になりたいこと……光あふれるその瞳は、誇らしげだったと夫は声を詰まらせていた。

この町の子ども達は、えんぶりを通し地域に育てられている。豊かな文化を守り継承していくその先の未来は、真っすぐで明るい。

受賞の言葉

このたびは大きな賞に選んでいただき、誠にありがとうございました。青森の県南地方には「えんぶり」という郷土芸能があります。この「えんぶり」を通し私の住む町の子も達は、地域に育てられています。地域コミュニティは、社会のルールを教える学校の役割になるのでしょうか。そこで子ども達は豊かに成長しています。これからも、かけがえのない文化を次の世代へと継承しながら、地域全体で子育てをしていきたいと思ひます。

厚生労働大臣賞・最優秀賞

私を支えてくれるもの

林 亜麻美(兵庫県)

不思議なことに、子どもはきまって小児科が休診の時に熱を出す。しかしまあ、娘が幼かった頃は、さほど問題にはならなかった。夫に車を運転してもらって救急病院に連れて行けばよかったから。

でも、今は違う。7歳違いで息子が生まれ、同時に夫が転勤になった。「転校したくない」と言う娘のために、夫は単身赴任している。そんな私にとって、息子の発熱は一大事だ。娘を起こし、2人をなんとかタクシーに乗せ、救急病院に駆け込む。そんな夜が何度あっただろう。私はそのたびに「こんな生活は無理だ」と泣いた。いや、泣いていた。そのときはまだ「大切なもの」に気がついていなかったから。

「大切なもの」に気づけたのも、息子の発熱がきっかけだった。日曜日の昼過ぎに出た突然の高熱。ちょうど予防接種の副反応が起きるタイミングで、私は、応急処置がメインの救急病院ではなく、小児科に行こうと考えた。ご近所さんに日曜も診察しているところを教えてもらう。けれども、行ってみると「診察終了」の札が。仕方なく家に戻ったが、そうこうしている間にも熱は上がり続け、やっぱり救急病院に行くことにする。

外へ出ると、「下がるの?」とお向かいのママ。そして「車出すから乗って行き!」と。ビックリして断る私に、「こんなときになに遠慮してるん! ビール飲まんようにしてたんやから、乗って行き!」。私はふいに泣きそうになった。お礼の気持ちがあまく言葉にならなくて、「ああ、自分はこんなにも不安だったんだ」と思った。夫がいない間に何か起きたら、万一のことがあったら・・・無意識に抱え込んでいた不安に「1人でそんながんばらんでも」と言われた気がした。



送ってもらう車の中で、ふと「コミュニティ」という言葉が浮かぶ。大学の授業で聞いたときには、「『しがらみ』ってやつか?」と鼻白んだっけ。あのときの自分に言ってやらなければならない。コミュニティとは「人の心が結びついた一つの形なのだ」と。そして、いつの日か、「そのコミュニティに支えられて子育てをする日が来るのだ」と・・・。

私は娘の育児でいわゆる「密室育児」を経験した。だからこそ思う。子育てはだれかに支えられてするものだ。実際の手助けでなくてもいい。「いざとなったら助けてくれる人がいる」。そう思えるだけで、気持ちはうんと軽くなる。すると子育てが、少し楽しくなってくるのだ。

単身赴任ライフは、まだ始まったばかり。でも、私はここで夫の帰りを待つことに決めた。「困ったことがあったら、夜中でもピンポンしたらええんやで!」と言ってくれる人たちがいるこの場所で・・・。

大丈夫。心の拠り所があると、結構がんばれたりも、するものだ。

受賞の言葉

私は「コッコママのはなまる毎日。」という子育てブログを書いています。そこで孤独感を抱えて苦しむママに出会うたびに、かつての自分を思い出します。駆け込んだ小児科で「お母さんは大丈夫?」と聞かれ、うれし涙が止まらなかったあの頃…。人は何気ない一言に癒され、元気になれるりするものです。

すべてのママが、心の支えを得て、笑顔で子育てができますように。このたびは、すばらしい賞をありがとうございました。

最優秀賞

風変わりの託児所

山本 信之(愛知県)

5歳と3歳の兄弟、4歳と2歳の兄妹、両隣の可愛い子どもたちだ。今では、私の大切な友達である。

お母さんはいずれも30代、嫁いできた人で、地元馴染みはなく、隣にいても誰だか分からないような存在だった。

それが、子どもが生まれ、外へ連れ出すようになると、車の通らない私の畑の道が恰好な散歩道になって様子は変わった。

リタイア後で畑に居ることの多くなった私。当然顔を合わせる機会が増えていった。初めのうちはありきたりの挨拶程度だったが、子ども好きの私、それだけではどうも物足りない。子どもにも一言声を掛けるようになっていった。

「かわいいね」

「名前は何んというのかな」

名前を覚えた私、次の日からは名前を呼び、着ている洋服、持っているおもちゃ等を誉める。初めは警戒していた子どもも、次第に心を開き、懐いてくれるようになった。

子どもたちと接する時、私が一番気を使うのは名前を間違えないことだった。今風の凝った名前が多いので覚えるのに一苦労であったが、ポケ始めた頭に叩き込んだ。そして、4人に分け隔てなく話すようにも心掛けた。

2人のお母さんとの接し方にも細心の注意を払った。付かず離れずで、今のところうまくいっているようだ。

そんな私に、お母さんも、子どもたちも、気を許してくれたのだろう。この頃、私の畑の周りで遊ぶで行く時間が長くなった。

子どもにとって、畑はいい遊び場である。土はある、様々な虫がいる。4人の幼い子どもが顔を

突き合わせて遊んでいる姿は、なんとも心ほのぼのとしてくる。お母さんが畑を荒らさないように注意するのを私は制する。

「どうせ遊び半分の畑仕事です。私が遊ぶか、子どもが遊ぶかのことですから」と言う。どうにもいけない時は優しく諭すが、そんなことはほとんどない。

2人のお母さんは、畦に腰をおろして世間話に花を咲かせる。お母さんの笑い声、子どものはしゃぐ声、と私の畑は賑やかだ。

時には、出来た野菜を分けてあげることもある。真っ赤に熟れたトマトを子どもに一つ一つ持たせてあげた時には、子も親も心底喜んでくれたようだった。そんな時には、こちらまで幸せな気持ちになれる。

やんちゃ盛りの子育てはさぞ大変だろう。私の畑が、2人のお母さんの息抜きの場になってくれるなら願っても無いことだ。

犬を飼っている私を子どもたちは「ワンワンのおじちゃん」と呼んで親しんでくれる。

畑の作物も可愛い、子どもたちはもっと可愛い。

私は、ちょっと風変わりの託児所を開設しているような気分だ。



受賞の言葉

この度は受賞の栄誉に授かり感激に堪えません。私は小学生の登校時に交差点で交通指導をしています。子どもの痛ましい事故を減らす一助になればとの思いからです。しかし、新聞紙上では毎日のように、子どもの虐待、育児放棄などの痛ましいニュースが報じられています。こんな残酷なことはありません。この現実を、私にはどうすることも出来ません。そこで、近所の子どもたち、お母さんと親しく親切にすることが、せめてもの子育て支援になるのでは、と考えているのです。



優秀賞 (20編)

氏名	タイトル	地域
❁ 安藤 彩子	チョッキン先生	群馬県
❁ 石井 ひろみ	子育て・子育ての秘密	愛媛県
❁ 伊関 千書	3人目のおばあちゃん	山形県
❁ 井上 奈美江	無音の愛	広島県
❁ 衛藤 準	抱っこする腕	大分県
❁ 金 順愛	アリラン子守唄	愛知県
❁ 糸内 泉	皆、元赤ちゃん	三重県
❁ 曾川 和子	いい子ねえ	大阪府
❁ 高橋 純恵	空とエンジェル	広島県
❁ 谷本 陽子	道端の隣人たち	岐阜県
❁ 田村 めぐみ	学生結婚	愛知県
❁ 徳安 利之	少年とろう者	広島県
❁ 富沢 美保	楽しいから、いいのよ	千葉県
❁ 林 真紀	子育てを「誇れる」社会へ	神奈川県
❁ 兵頭 佳苗	うちの子のサポーター	愛媛県
❁ 広部 有美	サロンに行こう！	滋賀県
❁ 福田 量子	初めての出産祝い	高知県
❁ 松野 敬子	遠くから、支えてくれてありがとう！	京都府
❁ 吉田 崇	月一イクメン!?	北海道
❁ 四元 明子	“今”から繋がる“未来”	福島県



エッセイ・ コンクールの 受賞者に インタビュー!

楽しく上手に子育てをする秘訣は、サポーターを増やすことにあり!?
自分から一歩を踏み出したことで、周囲の人たちの協力を
得られるようになったというすてきな子育て体験を
エッセイにつづってくれた受賞者の方にお話を伺いました。



林 亜麻美さん

エッセイに書かせていただいた「お向かいさん」をはじめ近所の方々とは、“家族ぐるみのお付き合い”ならぬ、“家族ぐるみの子育て”をさせてもらっています。夏に一緒に花火をした際、私が「下の子は花火初めてやねん」と言うと、記念写真を撮ってくれました。「初めての出来事は写真に撮って残す」という感覚も、まさに、一緒に子育てをしているからこそそのものだ、ありがたく感じました。大学の授業で「コミュニティ」という言葉を聞いたとき、

「しがらみってやつか?」と鼻白んだ私ですが、近所の方々との交流を通して、その大切さに気づくことができました。近所の井戸端会議で「次は誰々さん家の子が入学ね」といった、子どもたちに関する会話がよく交わされるのも、みんながお互いの子どもの成長を楽しみにしているからです。そして、こうした会話から子育てのネットワークが生まれ、助け合いの輪が広がっていくのだと思います。私たちのことを気にかけてくれる人が周りにいてくれる安心感が、子育てをする上で大きな心の拠りどころになっています。



田村 めぐみさん

私たちは「学生結婚」をしました。両親の猛反対を押し切った結婚、そして出産だったこともあり、当初は「誰にも頼らずに子育てをする」という気持ちが強かったと思います。そんな私を変えるきっかけになったのは、見ず知らずの人にかけてもらった「周りの人をもっと頼たらえんよ。あんたのこと助けたいて思てる人も、あんたが手のばさへんかったら助けてあげられへんやろ」という言葉でした。以後、外出する機会を増やすなど自分

から一歩を踏み出すようにしてからは、周りの人から声をかけてもらうことが自然と増えました。また、子どもや子育ての話題を通して、多くの方と仲良くなることもできました。

そして最近、通っていた大学内に新たに保育施設が開設されたという、うれしい連絡をいただきました。当時お世話になった教授が、私たちのことを学長に話してくれたことがきっかけだと聞いています。子育てを応援したいと思っている人たちは、実は周りにたくさんいるという、あの言葉を改めて思い出すとともに、「学生結婚」をする道を選んで本当に良かったと思っています。

子育て支援活動の表彰

参加者の声

私たちはこんな活動をしています!!



育児サークル「アンファン広場」

P.14

妊婦のときに参加しました。絵本選びに関するお話を聞いたり、赤ちゃんにベビーマッサージをしている様子を見て、いつか自分の子にしてあげるのが楽しみになりました。

予約の必要がなく、毎回違った講座を受けることができます。「食べる楽しさを感じさせてあげることが大切」と、教えていただいたことが心に残っています。



NPO法人 ふれあいサポート館アトリエ

P.16

頭の前から足の先まで泥んこになった姿から、その日1日、子どもたちが楽しく元気に遊んだ様子が手に取るようになります。

たくさんのお会いと、たくさんのお思い出。心にも多くの栄養をもらい、心身ともに成長させていただきました。



特定非営利活動法人 よもぎのアトリエ

P.18

僕は10代でパパになります。よもぎのアトリエで学んだことを大事にしながら、強く優しい父親を目指して頑張りたいと思います。

職場には幅広い年齢層のスタッフがいますが、みんな仲良し。忘年会や夏のレクリエーションの際には家族ぐるみでの交流が行われます。



特定非営利活動法人 阿羅漢

P.20

学童保育のちびっ子やサロンの高齢者に囲まれ、子育て奮闘中の私たちママさんも学ぶことがいっぱい楽しい施設です。

毎月のチャレンジ活動を楽しみにしています。ほんもの体験は、昔ながらの知恵や自然の偉大さに触れることができ、夢中になれます。



いっすね

ISSNE (岩手県南特別支援教育研究会)

P.21

サーキットトレーニングの平均台を速く歩けるようになって良かったです。トレーニングは楽しいです。

数年前から参加しています。幼稚園や学校ではお友達に理解されにくいわが子ですが、土曜日の教室では全て受け入れていただけます。親にとっても支えとなる活動です。



Nっ子クラブ カンガルーの親子

P.22

- 同じ境遇のママたちに、たくさん気持ちを聞いてもらって、いっぱい泣いて、スッキリして元気をもらっています。新しく入ってくるママたちにも、元気を送りたいです。
- 出産後すぐに、NICUに置いてあった体験手記を読んで勇気をもらいました。私たち親子にとって自然体でいられる場所。そして、元気をもらえる場所です。



NPO法人 子どもの村を設立する会

P.23

- 「子どもたちの主体性を引き出す」ことを目標に、ボランティアに参加しました。苦戦しながらも一生懸命に田植えをしている子どもたちの姿を見て、うれしい気持ちになりました。
- 初めての海を楽しむ！君と遊んだ海辺の時間が印象に残っています。一緒に拾った貝殻やきらきらの石を、今も大切にしてくれているのかなど考えたりします。



特定非営利活動法人 パパジャングル

P.24

- 普段なかなか子どもとふれあうことができないのですが、パパジャングルのイベントでは、父子そろって楽しい時間を過ごすことができました。
- 絵本ライブに初めて参加させていただきましたが、絵本がこんなに面白いとは思いませんでした。子育てが楽しみになりました。



ひさかた風土舎

P.25

- 寺子屋に通うようになってから、夏休みを計画的に過ごせるようになりました。家の手伝いも自主的にしています。
- 朝学の様子を参観しました。先輩が後輩の面倒を見るなど、異なる年齢の子どもたちが互いに協力して学ぶ姿に感動しました。



特定非営利活動法人 ブラジル友の会

P.26

- 日本語で書かれた問題の意味がわからず苦勞していましたが、放課後学習支援教室に通うようになってからは、先生たちが丁寧に教えてくれるので理解できるようになりました。
- ボランティアスタッフとして参加しています。お手伝いしているというよりも、目を輝かせて勉強に取り組む子どもたちの成長を楽しんでいます。

内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞・未来大賞

育児サークル「アンファン広場」

大阪府茨木市 代表者：田中 康子



子育てに一人で悩む
お母さんたちに、
誰かとつながりを持ちながら
育児することの楽しさを
知ってもらいたい



受賞の 言葉

私たちの地道な活動に光を与えてくださったことを感謝します。
「アンファン広場」は、スーパー内で活動をしている育児サークル。子育てを楽しむプログラム(リトミック、絵本の読み聞かせ、ベビーマッサージなど)と、親育ちに必要なプログラム(予防接種、離乳食幼児食、救急救命など)を行っていますが、どなたでも、買い物ついでに気軽に参加できる点が特徴です。人とつながりながら子育てをすることの楽しさを知ってもらう“きっかけ”を提供している私たちの活動が全国に広がることで、ちょうど大河が肥沃な土壌を育てるように、日本の子育て環境がより良いものになればうれしいです。

活動 内容

誰もが買い物に来るスーパーで
育児サークルを開催し、
孤立しがちな親に育児の楽しさ・
大切さを体感してもらう



● 誰もが気軽に参加できるスーパーで育児サークルを開催

中学校教師をしていた頃、問題行動を起こす生徒や保護者と対話する中で、子どもとともに親にも手を差し伸べることの必要性を感じていました。教職を辞してから、そのような支援活動の構想を練っていました。公共施設で開催されている育児サークルはありますが、敷居の高さから、参加に二の足を踏む母親が少なくないようです。そこで、誰もが普段足を運び、気軽に参加できる場所である「スーパー」の中に立ち上げたのが、育児サークル『アンファン広場』です。広場を開設するまでの道のりは平坦ではなく、自治体の子育て支援が既にあることを理由に、スーパー側から断られたこともありました。しかし訪問支援員としての活動実績が認められるとともに、社会環境の変化も手伝って、ようやくスーパー側の理解と協力を得ることができました。現在は月2回、売り場の一角をお借りして、リトミックや絵本の読み聞かせ、おもちゃ作りなど、親子で楽しめるプログラムを提供しています。

● 地域の中で孤立しがちな母親に手を差し伸べる

大阪のベッドタウンで、新旧の住民が入り交じる茨木市では住民同士の交流が希薄で、地域の中で母親が孤立しがちです。暗い表情で買物をしていたお母さんに声をかけたところ、その場で突然

泣き出してしまったこともありました。話を聞いてみると、周囲に頼れる人がおらず、子育てについて一人で悩んでいるとのことでした。そうした母親たちが、『アンファン広場』に参加することで次第に笑顔を取り戻し、誰かとつながりながら育児をすることの楽しさを実感してくれることは、私たちにとって大きな喜びです。

● 母親支援の取り組みを大阪から全国へ広げたい

孤立しがちな母親たちが地域に溶け込むための「入口」としての役割を果たしてきた『アンファン広場』。そうした地道な活動が評価され、新たに滋賀県内のスーパーでも、育児サークルが開催されることになりました。一人でも多くの、子育てに悩む母親たちに支援の手を差し伸べるためには、活動の規模をさらに広げることが必要と考えています。この活動が全国的に広まれば、日本の子育て支援はより充実したものになると思います。

名称：育児サークル「アンファン広場」

活動開始：2006年4月

スタッフ：10名

活動：第2、第4水曜日の10時から12時まで、スーパーの店舗内で様々な催しを開催。相談コーナーを設置し、育児に関する相談にも応じている。

連絡先：〒567-0006

大阪府茨木市耳原2-9-38-6

TEL.072-641-1608

文部科学大臣賞・未来大賞

NPO 法人 ふれあいサポート館アトリエ

福島県相馬市 代表者：倉本 信之



豊かな感性と
人間性を育むための活動を
46年間にわたって実施



受賞の 言葉

私たちの活動は1966年に始まりました。そして46年間という長い間、出会いやふれあいの中で互いに学びあい、明日への生きがいを創造しながら逞しく生き抜く力を、子どもたちに身につけてもらうための活動を続けてきました。そこに突如襲い掛かったのが、さきの大震災です。福島県内で活動する私たちは、原発事故による見えない恐怖の真っ只中にいます。今、子どもたちのトボスが脅かされて心の中には課題が見え隠れしています。そんな中、受賞の知らせを受けました。震災後の重たい空気が一変しました。未来に生きる子どもたちのための活動を続けていく上での糧にさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。感謝！

活動内容

子どもの創作教室に、遊び・野外活動などの要素を加え、全人格教育の観点から子育て支援と地域社会の創造に取り組む



● 創作活動・遊び・野外活動を三本柱とした活動を展開

46年前、自らの絵画制作の傍ら、絵画教室としてこの活動をスタートさせました。多くの子どもたちと接する中で「今、この子たちに何が必要で、一人の大人として何をしてあげられるのか」と考えるようになり、それ以来、絵画指導だけでなく、創作活動・遊び・野外活動を三本柱とした全人格教育を目指した活動を続けています。今の子どもたちは、遊びや野外活動を通じた学びの機会が少なく、社会性や豊かな心を身につけることが難しくなっているように思います。活動の幅を広げた背景には、子どもたちに、自分で考えて行動できる人間に育ってほしいという願いがあります。

● 異年齢交流を通じた新たな発見と学び

青少年の問題行動が社会問題になっていますが、そうした問題を解決するためには、幼少期・成長期において、異なる世代のふれあいを通じた心の教育が必要だと考えています。私たちの絵画教室では、学年の違う子どもたちが一緒に絵を学んでいます。また運営を受託している児童館では、高校生がボランティアとして参加しています。高校生が子どもたちの面倒を見る一方で、子どもたちに頼られることで高校生の側もまた、大人とし

て成長していく姿はとても興味深く思います。今後は、子どもたちと高齢者が世代を超えて交流し、お互いが支え合っていくような活動にも取り組んでいきたいと思っています。

● 震災で傷ついた子どもたちの心のケアを行っていききたい

当地域の子どもたちは、原発事故による放射性物質の恐怖に今なお怯えて暮らしています。加えて仮設住宅への入居や他地区への避難など、日々の生活もいまだ平穏を取り戻せずにあります。このような状況の中で重要なのが、心に傷を負った子どもたちの精神的なケアです。震災直後から私たちは、緊急を要する子どもたちの預かりや、大学院生ボランティアの受け入れ、そして著名カメラマンを招いてのボランティア活動などを行ってききましたが、そうした活動を継続性をもって続けていくことができるかが、今後の課題となりそうです。

名称：NPO法人
ふれあいサポート館アトリエ

活動開始：1966年4月

スタッフ：13名

活動：絵画や陶芸をはじめとした創作活動のほか、合宿、農作業体験、釣りなど様々な野外型のプログラムを実施。児童館の運営も行っている。

連絡先：〒976-0042
福島県相馬市中村字北町1-8
TEL.0244-36-5420

厚生労働大臣賞・未来大賞

特定非営利活動法人 よもぎのアトリエ

広島県広島市 代表者：室本 けい子



老若男女や障がいの有無を問わず、
みんなが力を合わせて助け合うことのできる地域社会を目指して



受賞の 言葉

初孫を得たとき、その命に感動し、愛おしきで涙があふれたことを覚えています。改めて、よもぎのアトリエの活動に参加する子どもたちを見てみると、わんぱくな3歳児も、生意気盛りの小中学生も、大人ぶった高校生も、何と愛おしいことでしょう！やはり子どもたちは生きる「希望」です。また私が知っている、自然に畏敬の念を持って野菜を育てている人たちは、いつまでも夢を語り、そして笑顔です。人間にとって育てることは、すなわち「生きがい」なのだと思います。今回の受賞の喜びを励みにして、今後も、子どもたちのために「生きがい」を感じながら活動を続けていきたいと思っています。

活動内容

有機無農薬弁当の配食や、ひとり親家庭の子育て支援活動『夕やけ会』、社会的に恵まれない子どもたちのための交流・学習の場『みんなが龍馬塾』など多様な活動を実施



● “よもぎ”のように、たとえ目立たなくても人の役に立つ活動を

子どもがアトピーに苦しんだ自らの子育て体験から、有機無農薬の食材にこだわったお弁当の配食活動を13年前にスタートさせました。その後、「すべての子どもにきちんとした食事、安心な居場所、そして個性や夢を伸ばせる支援を提供する」という理念のもと、ひとり親家庭の子育てを支援する『夕やけ会』、社会的に恵まれない子どもたちを対象にした『みんなが龍馬塾』、精神的な障がいを抱える方の自立を支援する『夢ひろば』を次々と立ち上げ、それぞれの取り組みをうまく結びつけながら、精力的に活動を行ってまいりました。

● 心身の健康は食事によって作られる

無農薬で育てた地元産の米と野菜、無添加の調味料を使った私たちのヘルシー弁当は、特に妊産婦や高齢者、病気療養中の方々に喜ばれています。また安全・安心とともに栄養バランスにもこだわっていますので、近隣の幼稚園や保育園からの注文も多く、子ども用の小さな弁当箱やタッパーに詰めて毎日届けています。

配達員はお弁当だけでなく、地域に安心も届けているようです。過去には、部屋で倒れているお年寄りを配達員が見つけて救急車を呼んだこともありました。地域の方々にとって、身近な“見守

り役”になればと思っています。

● 真に学ぶための力・生きるための力を育みたい

『みんなが龍馬塾』は、高陽地区と基町地区の2ヶ所で開催。同じ広島県内でも地域のニーズは様々ですので、それぞれのニーズを踏まえながら、子どもたちの学びのための場を提供しています。大学教授、民謡の師範、まちづくりプランナーなど多彩なスタッフとの遊びや語りを通して、子どもたちには強く優しい人間に育ってほしいと願っています。活動の一環として今年の夏に被災地で行った、広島名物・お好み焼きの炊き出しボランティアに参加した子どもたちは、笑顔やふれあい大切さを改めて学んだようです。市民活動だからこそできる「加点主義」の教育を今後も続けていきたいと思っています。

名 称：特定非営利活動法人
よもぎのアトリエ

活動開始：1998年7月

スタッフ：25名

活 動：「よもぎのアトリエ(配食)」月～土
「みんなが龍馬塾(基町校)」
小中学生の部：土曜日の日中
高校生の部：金・土曜日の夕方以降
その他にも、旅行やバザーなどのイベントを
随時企画・実施している。

連 絡 先：〒739-1742
広島県広島市安佐北区亀崎4-12-1
TEL.082-840-0280

未来賞

特定非営利活動法人 阿羅漢

石川県加賀市 代表者：福田 美智子

温泉地特有の問題を抱える地域ならではの
子育て支援をしています



活動
内容

生活保護や就学援助家庭の割合の高い温泉地域で、
閉店したパチンコ店の店舗を改装し、子育て支援複合施設を運営

● 温泉地が抱える課題

全国有数の温泉地として知られる山代温泉ですが、生活保護や就学援助を受ける家庭の割合が2割を超える事実はあまり知られていません。温泉旅館などで働く親が多く、夜になっても家で一人寂しく過ごす子どもたちがたくさんいます。そんな、親とのふれあいの少ない子どもたちが、学校や地域社会で問題となるケースが増えていました。

こうした問題を抱える温泉地で、地域の区長に「地域の子もたちを守るための活動に知恵を貸してほしい」と声をかけられたことが、現在の活動を始めたきっかけです。

● パチンコ店を改装した拠点で子育て支援

活動拠点となる施設を探していたところ、町の中心地に閉店したパチンコ店があることを知りました。全体を見渡せるワンフロアのスペースを確保でき、事務所や従業員用の食堂・宿泊施設が一体となったパチンコ店は、子どもたちの交流・活動の場所として、また家庭内暴力などから逃れる家族の駆け込み寺として、思い描いていたイメージにぴったりでした。今では、口コミで評判が広がり、地域の方から「行き場を失くした親子がいるがどうかできないか」といった相談があり、車上生活をしていた親子を受け入れたこともあります。

● 様々な活動で子どもの育成をサポート

お祭りなど地域のイベントがあるときには、子どもたちだけで切り盛りする屋台を出して積極的に参加しています。地域の方たちもイベントなどで一度顔を覚えると、その後は別の場所で会っても子ども

たちに声をかけてくれるようになり、人と人とのつながりが生まれています。こうした草の根的な交流を通じて、コミュニティ機能を回復させ、住みやすい地域にしていくことも、重要なことだと思っています。

また、親から一般常識を学ぶ機会のなかった子どもたちにとって、自然の中で仲間との交流などを通じて学ぶことは、社会との関わりを知る上でもとても大切です。今後はこうした本物の体験をする機会をいっそう充実させていきたいと考えています。

名 称：特定非営利活動法人 阿羅漢

活動開始：2009年8月

スタッフ：15名

活 動：子育て支援「すまいる広場」、学童保育「ちゃれんじゃー」、夜間学童「たそがれハウス」、地域巡回相談業務「やましろ」、地域開放交流教室「やたがらす」、若者自立支援ホーム事業「ドリーム」などの活動を行っている。

連 絡 先：〒922-0242

石川県加賀市山代温泉 18-52

TEL.0761-76-1085

受賞の
言葉

未来賞 ありがとうございます。「強い光の影は、より暗い」と言われます。温泉地は、皆さんに癒しを与える場所ですが、そこに暮らす者にとっては、子育てをする上で多くの困難がある場所でもあります。私たちは今後も、複雑多岐にわたる問題・悩みを抱えた子どもたちや保護者の方がいつでも駆け込むことができる施設作り、そして様々な相談事に対応できる環境作りに努めていきたいと思っています。私たちの元を訪れた人だれもが笑顔を取り戻してくれることを願っています。最後に、関係者の皆様にはこれまで多大なるご支援を賜りましたことを、ここにお礼申し上げます。

未来賞

いっすね

ISSNE (岩手県南特別支援教育研究会)

岩手県一関市 代表者：鈴木 和子

「少しコツのいる子育て」を、楽しみながらお手伝いしています



活動 内容

「子育てに少しコツのいる」子どもとその保護者を対象に、親子で楽しみながら、子どもの発達を促すための活動を実施

● 子どもたちの成長を、家族とスタッフが一緒に見守ります

落ち着いて行動することや人と関わることを苦手とする、「子育てに少しコツのいる」子どもたちと、その保護者を支援するための活動を10年間続けています。発達障がいのお子さんを持つ保護者向けの会の運営に携わっていた頃、子育てに悩むご家族の様子を数多く目にしたことが、この活動を始めたきっかけです。当時、キャンプのお手伝いなどをさせていただいたとき、親子が一緒になって楽しむ時間を作ることが、より良い親子関係を築く上で何より大切であるとの実感を持ちました。そのため、私たちの活動では親子揃っての参加をお願いします。現在は父親の姿も多く見られるようになり、時には祖父母の姿も見られます。親子、家族、そしてスタッフが一緒に楽しみながら、子どもたちの成長を見守っています。

● 年齢別・発達別に様々なプログラムを用意

幼児期は、自由遊びや設定遊びを通じて経験を増やす「プレリトミック」と、音楽や遊びを通じて親子で運動する「リトミック」にそれぞれ挑戦。小学生になると、低学年は「ムーブメント」で体の感覚を、高学年は「ソーシャルスキル」で社会性を養います。年齢や発達の度合いに応じて必要な要素を取り入れた複数のプログラムを行うことで、子どもたちの良いところをできる限り多く発見できるよう心がけています。また「ペアレントトレーニング」という、保護者向けのプログラムも定期的で開催しています。子どもたちは周りの不安を敏感に感じ取る

ものです。発達障がいに関する理解を深めていただくことで、子どもたちへの接し方を学んでいただくことを目指しています。支援者向けの研修会も定期的に行い、地域の方々に「少しコツのいる子育て」をご理解いただけるように活動しています。

● 卒業生も頑張っています

活動開始当初にプログラムに参加していた子どもたちは、今は成長して社会に出て行く年齢となりました。自分に合った仕事に励む姿や、やりたいことを見つけて勉学に取り組む姿を見るのは、とてもうれしいことです。現在参加しているお子さんのご家族にとっても、そうした姿は大きな励みになっていると思います。

名 称：ISSNE (岩手県南特別支援教育研究会)

活動開始：2002年2月

スタッフ：33名

活 動：6～2月(8月は休み)の第2土曜日の午前中
年齢：発達別の教室を開くほか、保護者向けプログラムや支援者向け研修会も定期的に開催している。

連絡先：〒021-0041

岩手県一関市赤荻字笹谷 306-8

TEL.0191-25-4547

受賞の 言葉

活動を始めて10年。NPO法人化して活動の幅を広げようとしていたタイミングで、このような賞をいただき、背中を押していただいたような気がしました。私たちの地道な活動が、地域だけでなくこのような形で認められたことに、スタッフ一同感激しています。本当にありがとうございました。発達障がいのお子さんを取り巻く環境や制度は刻々と変化しています。活動を続ける中で苦しい時期もありましたが、そこにはいつも子どもたちの笑顔があり、その笑顔に勇気づけられました。受賞の喜びを、子どもたちや保護者と分かち合いながら今後の活動の励みとさせていただきますので、温かい目で見守っていただければ幸いです。

未来賞

Nっ子クラブ カンガルーの親子

福岡県筑紫野市 代表者：登山 万佐子

「小さな命」を育てるお母さんたちが
悩みを打ち明けあえる居場所を作りたい



活動
内容

低出生体重児と、育児中に孤独感を感じてしまいがちな
その家族のための「親子の会」を開催

●「定例会」と「遊びの広場」で子育て支援

低出生体重児とその家族のために、市の施設を借りて月1回の定例会と、月2回の遊びの広場を実施しています。定例会では、育児に関する学習や情報交換のほか、同じ境遇にある者同士が話し合うことで経験や悩みを共有するピアフリートークなど、毎回異なる内容を企画。また、半年に1回のお下がり交換会も好評を博しています。遊びの広場は出入り自由のオープンサロンですが、保育士による親子遊びの時間や、作業療法士による相談会なども随時行っています。

子どもの成長とともに自然とこの活動から卒業していく方もいますが、それは少数です。一度参加してくれた方は、毎回の参加は難しくても、イベントの際にはサポートを買って出してくれるなど、何かしらの形で継続的に活動に関わってくれています。

● 同じ悩みを抱える母親同士が継続的に交流できる場を

「お母さんが笑顔になること、それが子どもたちの一番の栄養」を合言葉にして、同じ新生児集中治療室(NICU)を卒業した仲間たちと、この活動をスタートさせました。NICUは県内各地にあります。早産などの緊急時には自宅近くの施設に搬送されるとは限りません。そのため、入院中に悩みを共有できていたお母さんたちと、退院後は関係性を保つことが難しくなるケースも多々あります。活動を開始した背景には、同じ不安や悩みを抱える者同士が、退院後も継続的に交流・相談できる場を作りたいという、実体験に基づく想いがありました。

● 活動場所は徐々に広がっています

今年度より、いつも活動をしている筑紫野市から60キロほど離れた宗像市でも月1回開催するようになりました。今年はそれ以外にも、6月に北九州、9月には柳川でも出張サロンを開きました。開催前は「活動拠点から離れた場所では人が集まらないのではないか」という心配もありましたが、当日は多くの方に参加いただきました。そうした出張サロンを通じて、同様の悩みを抱える方が各地にいること、そして彼女たちを支える活動の重要性を再認識させられました。

名称：Nっ子クラブ カンガルーの親子

活動開始：2007年11月

スタッフ：6名

活動：「定例会」(学習や情報交換の場)：第3木曜日
「遊びの広場」(オープンサロン)：第1水曜日、
第3木曜日
「虹っ子広場」(宗像市で開催)：第3火曜日

連絡先：〒818-0056

福岡県筑紫野市二日市北2-3-3-402

TEL.090-8666-7748

受賞の
言葉

受賞の知らせを聞き、仲間たちと飛び上がって大喜びしました。本当にありがとうございます。医療技術が進み、手のひらに乗るほどの小さな小さな命がたくさん救われるようになりました。しかし、低出生体重児の子育ては「これからどうなるのだろう」という不安からスタートします。1500g未満で生まれる赤ちゃんはわずか1%。育児の仕方でも世間一般の方法が通用しないことが少なくありません。私たちの活動が、不安でいっぱいのお母さんとご家族が笑顔を取り戻す場所、子どもたちの笑顔があふれる場所になっていると評価していただいたと、うれしく思っています。これからも小さな命が安心して育つよう、たくさんのご家族の笑顔のために活動を続けてまいります。

未来賞

NPO法人 子どもの村を設立する会

京都府京都市 代表者：田原 邦夫

傷ついた子どもたちの健全な育成を支援する



活動
内容

虐待・育児放棄などにより傷ついた子どもたちの健全な育成のため、宿泊事業・野外活動事業・食育事業を実施

● 食事の準備から後片付けまで学ぶ食育事業

京都市内の児童養護施設や母子家庭支援施設を訪問し、各施設が抱える問題や子どもたちに必要な支援について一緒に考え、専門家を交えて支援活動に取り組んでいます。施設で暮らす子どもたちが抱える問題点のひとつは、日常生活の経験の乏しさです。特に食については、入所中は給食として提供されることもあり、料理の仕方や食材の買い物の仕方といった基本的なことさえ身につけていない子もいます。食育事業では、施設では体験できない食事の準備から調理、後片付けまでを支援スタッフとともにやり、共同作業の大切さを教えるとともに、子どもたちの自立・自活力を養っています。

● 非日常体験により大きな成長を期待

自ら進んで何かを体験する機会が少ないことも、施設で暮らす子どもたちが抱える問題点のひとつです。そこで私たちは年数回、子どもたちのための体験学習の場を設けています。秋に行われる農業体験には、小中学生を中心に30~50名が参加。農場近くには、私たちのパイロットハウスがあり、子どもたちはそこに宿泊して交流を深めます。また農場周辺の方とも良好な関係が築けており、子どもたちが活動していると色々な作物を届けてくれます。こうしたふれあいは、普段閉鎖的な環境で暮らす子どもたちの心に良い影響を及ぼしているようです。

● 活動に携わる全ての人とともに成長していく

施設外の活動を通じて刺激を受けるのは、子ど

もたちだけではありません。施設のスタッフもまた、外部ボランティアと交流したり、普段なかなか見ることのできない子どもたちの笑顔を目にすることで、大きな刺激を受けているようです。このように側面からの支援を行うことで、施設に暮らす子どもたち、施設のスタッフ、そしてボランティアメンバーが相互に成長できることが、私たちの活動の意義だと考えています。

名 称：NPO法人

子どもの村を設立する会

活動開始：2004年6月

スタッフ：30名

活 動：「子どもの村」づくりを目標に、食育事業などを通じて、施設に暮らす子どもたちを支援している。また年に数回、農作業を始めとした体験学習の場を設けている。

連 絡 先：〒604-0845

京都府京都市中京区二条殿町541番地 4階 相談室
TEL.075-255-4855

受賞の
言葉

虐待や育児放棄に関する痛ましいニュースを、毎日のように目にします。傷ついた子どもたちが未来に夢を抱いて生活できるように、新たな出会いや絆を大切にしながら様々な事業や行事を、草の根レベルで行っています。設立して7年目を迎えますが、このたび活動を認めていただいたことの喜びは何ものにもかえがたいものです。少子化の進むなか、子どもたちを社会全体で健全に育むことが、私たち大人の役目だと考えています。明るい未来への扉を開けていただいた本プロジェクトに感謝いたします。ありがとうございました。

未来賞

特定非営利活動法人 パパジャングル

福井県坂井市 代表者：荒巻 仁

父親同士のネットワーク作りを通じて、父親の育児参加を応援したい



活動
内容

学童保育・父子キャンプ・絵本の読み聞かせなどの活動を通じて、
地域の子どもたちとの交流を図るとともに、父親同士の繋がりを作る

● 育児に参加するパパたちのロールモデル

三世代同居率の高い福井県には「孫育て」の文化があります。そのため、子育てにおける父親の出番は、母親、祖父母に次いで4番手、ということが少なくありません。子どもを見守る目が多いことは良いことですが、それが父親の育児参加の障壁となっている面もあります。パパジャングルは、全国でも数少ない「地域密着型の父親支援組織」。放課後子どもジャングルという学童保育を運営していますが、ここでの活動は男性スタッフによる外遊びが中心です。子どもを育てるパパたちのひとつのロールモデルを示すことができればと思っています。

● 絵本を好きになってもらうために

地域の幼稚園や保育園、小学校に出向き、絵本の読み聞かせも行っています。読み手の解釈が加わることで子どもたちの自由な想像を奪うという理由から、読み聞かせを行う際に声色を変えることは望ましくない、という声も聞かれます。しかし私たちの読み聞かせでは、声色や表情を変えるのは当たり前。演技やアクションを加えたり、質問をして子どもたちの参加を促したり、歌やゲームを取り入れたりして、自由に絵本を楽しんでいます。「パパジャングルの楽しい読み聞かせをきっかけにして、それまで全く絵本に興味なかったうちの子が絵本に興味を持つようになった」といった感想を、保護者の方から多くいただいています。

● 「イクメン」から「イクメン」へ

「自分の子どもだけを良い子に育てても幸せにはなれない」と考えています。わが子の育児に参加

する父親(=「イクメン」)から一歩進んで、地域の子どもたちとも積極的に関わりを持つ父親(=「イクメン」)になるためには、パパ友の存在が欠かせません。父子キャンプなどのイベントは、同じ地域内で子育てに奮闘する父親同士の出会いの場にもなっています。活動拠点のある春江町内の小学校とは良好な関係を築いており、私たちのイベントの案内は、全ての保護者の手元に届けられる仕組みになっています。個人的には、活動を通じて町内の小学生2000人全員と友達になることが目標です。

名 称：特定非営利活動法人 パパジャングル

活動開始：2008年6月

スタッフ：20名

活 動：男性スタッフ中心の学童保育「放課後子どもジャングル」を年間250日以上開所。父子キャンプや絵本ライブなどのイベントも随時企画・実施している。

連 絡 先：〒919-0412

福井県坂井市春江町江留中18-1-5

TEL.090-2017-7267

受賞の 言葉

受賞の知らせを聞いたとき、とてもうれしかったです。学童保育・父子キャンプ・絵本ライブなど、自分たちがしたいことに全力で取り組んでいるだけですから、「誰かのために」とか「支援をしている」といった意識はありません。むしろ、私たち自身がたくさんの笑顔や幸せをいただいています。自分たちが楽しみ、参加者にも楽しんでいただいた結果として、たくさんの子どもたちと友達になれたり、地域のお父さんたちのパパ友づくりのお役に立てるのですから、これ以上幸せなことはありません。楽しみながら行っている活動ですが、それでも活動に意義を認め評価していただけるというのは、やはり光栄なことです。本当にありがとうございました。

未来賞

ひさかた風土舎

長野県飯田市 代表者：長谷部 三弘

寺子屋活動を世に広めることで、「地育力」の大切さを伝えていきたい



活動
内容

夏休みの間、地域の大人が「師匠」となって、子どもたちに勉強や遊びを教える「寺子屋」活動を20年間にわたって実施

● かつての寺子屋制度を現代に蘇らせる

夏休みの期間限定で行っている私たちの「寺子屋」は、朝のラジオ体操終了が開校の合図。地域の大人（師匠）が見守る中、子ども（寺子）たちはそれぞれ学校の宿題に取り組みます。寺子屋では勉強以外にも、工作や魚釣りなども教えています。寺子たちや保護者のリクエストを聞きながら、毎年色々なプログラムを準備しています。

寺子屋での学習は「自学自習」が基本ですが、わからないことがあれば周りの人に聞くこともできます。ですが師匠に聞く前に、まずは友達や上級生に聞くというルールを決めています。異年齢の子どもたちが自然と助け合うことを促すためのルールです。

学校教育制度がまだ整っていなかった昔、先輩たちは寺子屋を開いて、地域の子どもの地域での教育をしていました。私たちの寺子屋も、そうした先人たちの知恵と熱意をしっかりと受け継いでいます。

● 地域発の取り組みは国境を越えて

「行政頼みでない、自らの力による地域作り」をモットーに、教育ばかりでなく地域の農業やインフラの整備にも力を入れてきました。そうした活動が実を結び、京都大学や日本福祉大学の学生など、明日を担う若い世代との交流も生まれています。そして交流は、国内だけにとどまりません。上久堅地区の水道の仕組みを学びに、フィリピンの役場の方が視察に来ました。また、JICA研修生のための農業研修の受け入れはもう十数年続いています。ひさかた風土舎の「風」の字には

「外からもたらされる新たな価値観」の意を込めているのですが、国内外を問わず外部の方との交流を通して、上久堅地区には常に新鮮な風が吹き込んでいます。

● 上久堅地区を寺子屋の町にしたい

20年にもわたり活動を続けてきたことで、かつての寺子が今では親世代になっています。親子二世帯、さらには親子孫の三世帯で「寺子屋で学び、遊んだ」という体験を共有することができるようになればと願っています。

名称：ひさかた風土舎

活動開始：1991年8月

スタッフ：6名

活動：夏休みの期間中、地域の集会所を会場にして「寺子屋」を開校。工作教室や星見会などのお楽しみ会も随時開催している。

連絡先：〒399-2611

長野県飯田市上久堅1206

TEL.0265-29-7338

受賞の
言葉

現在、地方が抱える課題のひとつに「少子化」がありますが、ひさかた地区では「子どもは地域の宝である」と考え、住民が一体となって子育て支援に取り組んできました。学校教育制度がまだ整っていなかった時代に寺子屋という素晴らしい仕組みをつくった先人に倣って、地域の子どもたちを地域の手で育てることを目標に私たちも現代版の寺子屋を開校。多くの方との出会いや支えにも恵まれて、20年以上にもわたって活動を続けることができています。このたび、長年の寺子屋活動が評価され受賞となりましたこと、光栄に思っています。寺子屋の数をもっと増やし、今後は「寺子屋のまち」として認められるよう頑張っていきたいと思っております。

未来賞

特定非営利活動法人 ブラジル友の会

岐阜県美濃加茂市 代表者：金城 アリーナ

異なる言葉・文化・価値観を持った人たちが共存できる
地域社会の実現を目指して



活動
内容

日本の小中学校に通う、日本語を母語としない
外国籍児童への放課後学習支援教室を実施

● 行政と外国籍住民とを繋ぐ架け橋に

活動拠点のある美濃加茂市の外国籍住民人口比率は9%。これは全国の市の中で最も高い数字です。こうした状況を受けて、行政も様々な施策を打っていますが、実生活のレベルではなかなか対応が追いついていない面もあります。ブラジル友の会は、そうした行政とブラジル籍住民との間の溝（コミュニケーション不足の問題）を少しでも埋めるべく、地域の中で様々な活動に取り組んでいます。

活動のメインとなるのは、外国籍児童を対象にした放課後学習支援教室の運営です。外国籍の子どもたちが学校の外でも勉強できる環境と、進学に関する適切な情報を提供することを目的に活動を開始。現在は、月・水曜日の夕方に「小学生の部」、月・金曜日の夜に「中学生の部」を開催しています。参加者は近所に住む小中学生が中心ですが、なかには隣町から通う子たちもいます。保護者や子どもたち同士の口コミによって参加の輪が広がっています。

● 子どもたちに夢を持ってもらうために

就職など将来への不安感から、生徒たちの学業に対するモチベーションが下がってしまうことがあります。そこでブラジル友の会では、子どもたちに夢や希望を持ってもらえるよう、バイリンガルの方が活躍する職場への社会見学・職業体験も行っています。こうした体験と、身近にいるこの教室の卒業生たちの活躍を目にすることで、最近では、通訳、学校の先生、研究者などを目指して

意欲的に学習に取り組む生徒たちが増えています。

● かつての生徒が今は先生に

放課後学習支援教室は多くの方々に支えられ運営されていますが、その中には教室出身の先輩たちの姿もあります。活動開始から歳月を経て、「教えられる側が教える側にまわる」という好循環が生まれています。同じような境遇のもとで困難を乗り越えてきた先輩たちとの交流は、生徒たちにとって、単なる学習支援以上に意義のあるものとなっています。

名称：特定非営利活動法人 ブラジル友の会

活動開始：2000年春頃

スタッフ：15名

活動：放課後学習支援教室

小学生の部 月・水曜日 15:30～17:30

中学生の部 月・金曜日 19:00～20:30

その他、職業体験イベントや保護者向け進路説明会などを実施。

連絡先：〒505-0044

岐阜県美濃加茂市加茂川町 1-1-1

TEL.0574-25-9750

受賞の
言葉

未来賞を授与いただきましたことを心よりお礼申し上げます。こうした賞をいただけたのも、今まで支えてくださった多くの方のおかげだと感謝しております。私たちは任意団体の頃より、子どもたちの無限の可能性を日々感じながら活動を続けてきました。私たちの始めた小さな活動が県内だけでなく、地域をつなぎ、日本に広がり、世界へ、そして未来への懸け橋となることを願ってやみません。これからも、私たちにできる「小さな一歩」を踏み出し続け、子どもたちの夢の実現のお手伝いをしていきます。私たちはどこにいても、一人ひとりが同じ地球人なのですから。

女性研究者への支援

浅田 恵美子

京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻
博士後期課程

研究テーマ 「不妊」をどう生きるか
— 当事者のローカル・バイオロジー —

内容 日本では現在、約47万組のカップルが「不妊」に悩んでいるとされる。子どもを持つことの意味を問われる点において、「不妊」は当事者に対して「自身の人生をどう生きるか」「人生において何を重要と考えるか」という選択を常に迫るものである。本研究は、ローカル・バイオロジーの概念を援用しつつ、異なる背景を持つ不妊体験者へのインタビュー調査を通じて、それぞれの主観的体験のあり方を、生き方との関わりも含めて明らかにすることを目的とする。「不妊」を抱えた生き方の多様性が示されることは、当事者や支援者の「不妊」のとらえ方を変容させることにも繋がると考えている。

オ ヒ ス 呉 禧受

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

研究テーマ バイリンガル教育の要因
— バイリンガル児童とその親のビリーフと母語保持努力を中心に —

内容 急増する外国人児童を日本社会の一員として認め、彼らを言語的に支援することは大変重要なことである。本研究では、外国人児童とその親を対象に調査を行い、バイリンガル教育に対する考え方と不安要因を明らかにする。本研究が対象にするのは、海外で生まれて後に日本にやって来た子どもたちではなく、幼児期に来日、もしくは日本で生まれたため日本語には不自由ないと思われる子どもたちである。日本において当分野の研究は始まったばかりであり、バイリンガル児童の母語能力を獲得・維持させるための要因を明らかにすることで、日本における今後のバイリンガル教育の在り方と具体的な方案の構築を目指す。

キム ドン ヨン 金 東妍

東京大学大学院総合文化研究科 博士課程

研究テーマ 日中戦争・太平洋戦争期における「戦中詩」研究

内容 戦中詩とは「戦争を題材にした詩歌」のことである。戦時中「思想がない」「事実の描写にとどまっている」などの理由で詩壇の中心から貶められた戦中詩は、戦後、正当に議論・評価される場を失った。しかし『ガダルカナル戦詩集』はもとより、日中戦争初期に詠まれた戦中詩の学問的な研究価値は非常に高い。強いられた戦争に向き合わせるを得なかった青年たちの声。その声から現代的な意味を発見することが、本研究の目的である。詩の世界にとどまらず、広く現代そして未来について展望していく上でも、詩史の狭間で埋もれていた戦中詩に改めて光を当てることの意義は決して小さくないと考える。

受賞の言葉



子どもの誕生と同時に大学に戻り、子育てと研究の両立に奔走してきた数年間でしたが、その中で数多くのことを学びました。ご指導いただいた先生方、支えてくれた家族はもちろん、子どもの成長をともに見守ってくれた研究室や保育関係の皆様から感謝いたします。今回の受賞を励みに一層研究に邁進し、自身の時間と重ねつつ、女性の生きる時間（とき）のあり方を考えていきたいと思っています。

受賞の言葉



この度は、助成対象に選んでいただきありがとうございます。研究のきっかけを与えてくれた長男は、私以上に喜んでくれています。また、休日には自由に研究ができるように全面的にサポートしてくれた夫と、いつも励ましてくださった先生方に感謝の意を伝えたいです。今回の受賞を、「バイリンガル教育」というテーマに対する期待と受け止めた上で、さらに研究を進め、社会に貢献できる研究成果を出したいと思っています。

受賞の言葉



留学生夫婦として子育てと研究を両立させるために日々奮闘していますが、子どもたちの笑顔と、指導員をはじめとした研究仲間の励ましに支えられて、これまで研究活動を続けることができました。母でありながら研究者としての道を歩むことの厳しさを実感することも少なくありませんが、本助成に選ばれたことで、何よりも心強い励ましと勇気をいただいた気がしています。助成対象に選んでいただき、心より感謝しています。

小沼 和子

一橋大学大学院言語社会研究科 博士後期課程

研究テーマ ドイツ中近世印刷本における挿絵及び木版画の役割
— 民衆本『ティル・オレインシュピーゲル』を中心に —

内容 15世紀にドイツで発明された印刷術は情報伝播に大きな変化をもたらした。この印刷術によって民衆の間に広く流通した情報媒体が「民衆本」であり、なかでもドイツ民衆本は翻訳され、近隣諸国に広く流布された。従来の民衆本研究ではテキスト内容の解釈が中心で、文書中の図版との関連付けが希薄であった。しかし識字率が低かった当時においては、挿絵や木版画といった視覚的要素が大きな役割を果たしたものと考えられる。そうした時代背景に鑑み、ドイツ民衆本に用いられた挿絵や木版画に着目し、それらが情報の伝播にどのように作用したのかを解明することが、本研究の目的である。

受賞の言葉



助成対象に選んでいただきありがとうございます。私は夫とともに留学したドイツで二人の子どもに恵まれました。帰国後は大学において、日本とドイツでの育児経験者として、小さな子どもを持つ研究者の研究環境の改善に尽力してきました。今回の助成は、私が研究を進めていく上で非常に大きな推進力となります。今後も日本とドイツ、両国での経験を生かし、研究に取り組んでいきたいと思っています。

齋藤 優子

東北大学大学院国際文化研究科・国際環境システム論講座 博士課程後期

研究テーマ 廃棄物資源化行政における政策決定プロセスに関する研究
— 都市鉱山事業と災害廃棄物処理政策の日韓比較を中心に —

内容 これまでの日本の廃棄物政策は、都市鉱山事業の推進にみられるように「高品質の資源を集め、最新技術を駆使してリサイクルする」循環型社会の形成を目指すものであった。しかし昨年の震災により、被災自治体では公衆衛生の水準確保を第一目的とする、いわば廃棄物処理の原点に回帰する形となった。本研究では、上記二つの廃棄物政策の視点から、日韓両国の廃棄物に関する政策決定プロセスの比較を行う。地方自治の主導性、社会的ステークホルダーの関わり方など、日韓の廃棄物政策の特徴と相違点を明らかにすることにより、今後目指すべき廃棄物政策の方向性を示す萌芽的研究を行う。

受賞の言葉



震災後、研究を諦めざるを得ないと思った時期もありましたが、助成決定の知らせを聞き、研究継続に向けて大きな力をいただくことができました。日々サポートしてくれる家族はもとより、日頃ご指導くださっている先生、調査研究にご協力いただいている方々、そして温かい手を差し伸べてくださる地域の皆様の恩に報いることができるよう、これからも研究を通して「東北で生きる意味」を問うていきたいと思っています。

清水 文枝

明治大学大学院博士後期課程・明治大学政治経済学研究所

研究テーマ 在外米軍基地と米国の安全保障戦略

内容 日本と同じ島国であるフィリピンにはかつてアジア最大級の米軍基地が存在した。1991年にフィリピン議会が基地の継続を拒否したため米軍は撤退したが、撤退後も両国は安全保障の面において良好な関係を維持している。基地問題に悩む日本が、米国とフィリピンの関係から学ぶべきことは多いと考える。米政府の公文書をもとに、同国における在比米軍基地の戦略上の位置付け、ならびに基地を介したフィリピンとの同盟関係について検証する。そして米国の安全保障戦略の分析を通じて、日本が米国との同盟関係を今後どのように構築すべきかを導き出したいと考えている。

受賞の言葉



子どもとの時間を大切にすれば研究が滞り、逆に研究時間を増やせば子育てがおろそかになるのではないかと、ジレンマに悩むこともありました。そのような中、本プロジェクトを通して、子育てをしながら様々な環境で頑張っている女性研究者がいることを知り大きな勇気をいただきました。推薦して下さった先生や所属長に感謝するとともに、支えてくれる家族のためにも、研究に一層励みたいと思っています。

西野 範子

金沢大学国際文化資源学研究センター

研究
テーマ

文化資源学の実践
ーベトナム、ハノイ、キムラン窯業村を事例としてー

内容

1995年からベトナムで行ってきた研究も一定の成果を挙げ、現在は、その成果を実地で検証していく段階へと進んでいる。その具体的な活動の一つであるキムラン村立博物館建設プロジェクトは、ベトナム国内で伝統的技術や文化の伝承が行われなくなっている現況に鑑み、村落の次世代の人々が村の伝統を視聴覚的に学べる場を作るべく立ち上げた。そこでは、ベトナム村落における窯業村の位置付けから、広くアジアの中でのキムラン村の位置付けまでもが理解できるような展示設計を心がけている。これまでの研究を社会に還元するために、こうした活動を通じて、文化資源学という新たな学問を「実践」していきたいと考えている。

受賞の
言葉



現在、歴史や文化に対する関心が低くなっているように感じます。文化は生活に潤いをもたらすものであり、子どもを育てる中で「家庭」という生活文化の重要性を改めて実感しています。二人の男の子の子育てと研究の両立はとても大変なのですが、母になったからこそ、研究面で理解できたことも多いです。研究を通じて、文化の重要性を発信していきたいと思っています。このたびは、ありがとうございました。

福島 雅子

東京芸術大学大学院美術研究科 博士後期課程

研究
テーマ

近世初期の武家服飾に関する研究
ー伝徳川家康所用服飾類を中心にー

内容

徳川家康所用と伝えられる服飾類は、伝来の確かな遺品として、日本の染織史上きわめて貴重な作品群といえる。本研究では、徳川家康所用服飾類の中でも、現存する葵紋付の服飾類を中心に精査することで、江戸時代を通じて規範となった武家服飾形式の源流を探るとともに、その成立過程を確認し、近世初期の武家服飾における規範成立の意義を明らかにすることを目的とする。これまで、徳川美術館などが所蔵する伝徳川家康所用服飾類の調査を実施し研究成果の発表を行ったが、今後は作品調査と併せて文献資料の検討も進め、当該作品群が武家服飾の規範成立に与えた影響について包括的に検証することを目指したい。

受賞の
言葉



このたびは助成の対象に選んでいただき、大変光栄です。これまで、子育てをしながら研究を続けてこられたのは、家族や周りの方々の理解と支えがあったからこそだと思っています。いつも研究活動を支えてくださる先生方、研究室の皆様、そして共同研究の仲間へ改めて御礼申し上げます。また、常に私の研究に理解を示し応援してくれる家族にも感謝の気持ちを伝えたいです。受賞を励みに、育児と研究に一層励んでいきたいと思っています。

藤田 久美子

研究
テーマ

高知県嶺北地域におけるコミュニティを中心とした土砂災害対策

内容

我が国の土砂災害対策の歴史は古く、ダムなど構造物を中心とした対策により被害が軽減されてきた。しかし近年の局地的な集中豪雨の増加、私有林における施業放棄森林の増加、森林地域住民の高齢化などにより、従来の災害対策だけでは対応しきれないケースが増加している。本研究では、日本国内で最も森林率の高い高知県嶺北地域を対象とし、気候変動など地球規模での環境の変化と、過疎・高齢化等の社会条件の変化が森林管理に与える影響を明らかにする。加えてアンケートおよびヒアリング調査により住民の行動・考え方を把握し、地域の特性を生かした災害対策を提案することを目的とする。

受賞の
言葉



経済的に苦しく、また成果がなかなか出せないもどかしさもあって、このまま研究を続けていくべきか悩むこともありました。そのようなときに受賞の連絡をいただいたことで、自分の研究に自信が持てるようになるとともに、研究を続ける決意ができました。ありがとうございました。これまで研究を支えてくださった嶺北地域の方々、大学院の先生方や仲間、家族にも感謝の気持ちを伝えたいと思います。

三好 美知

東日本国際大学経済情報学部・教育実習センター

研究
テーマ

ケイバビリティ・アプローチにおける学校教育の役割の射程

内容

新自由主義が政策の柱となって以降、教育の公共性の意味が問い直されている。また、子どもの貧困もしくは貧困のサイクルが明らかになりつつあるが、自律や自己責任が強く求められる中、子どもの貧困も個人の責任の領域として捉えられる傾向にあり、貧困問題における学校教育の役割を改めて考えていくことが喫緊の課題となっている。こうした状況を踏まえ、「自律」「自己責任」といった新自由主義の規範を鋭く批判し、フェミニズムにより新たに提案されている「責任」という概念に依拠しながら、学校教育の役割や教育の公共性の意味を明らかにすることが、本研究の目的である。

受賞の
言葉



助成対象としてご支援をいただきますこと、心からお礼申し上げます。東日本大震災で被災し、研究と子育ての両立が気力だけでは支えきれない、ぎりぎりの状態にありましたが、助成が決まり、精神的・肉体的・経済的な支えとともに、研究を続けていくことに対してエールをいただいた気持ちです。今後も子育てと研究の両立に喜びを持って取り組みたいと思います。重ねてありがとうございます。

女性研究者に インタビュー!

子育てに、研究に、大忙しの女性研究者の皆さん。

育児と研究を両立させる上で大きな力になるのは、ご家族の応援のようです。そこで「家族の協力」をテーマに、受賞者の方にお話を伺いました。



齋藤 優子さん

海外での研究活動の際には、最短でも3、4日は家を空けなければなりません。昨年、韓国での学会発表・調査の機会があったのですが、まだ小さい子どもがいるため行くかどうか迷っていました。そんな私を、夫は「父と子の絆を深める良い機会になるから」と、快く送り出してくれました。私が不在の間、慣れない家事に奮闘する父親を助けようと、4人の子どもたちも、それぞれができる範囲で手伝いをしてくれたようです。素直に育ってくれている子どもたちと、私の研究の応援団長をしてきている夫に感謝の気持ちでいっぱいです。



藤田 久美子さん

修士課程在籍中、父母が子どもの面倒をよく見てくれました。冬の寒い夜中にミルクを作って飲ませたり、病気のときは寝ずに看病してくれたことは今でも忘れられません。昔から変わらず私のことを信じ、選んだ道を応援してくれる母は、私にとって子育ての良いお手本です。また、アメリカ滞在時には、妹が、私の代わりに家事や育児などをしてくれました。現在の私があるのも、修士号の先輩として研究活動の良き相談相手にもなってくれた妹、そして仕事をしながら子育てを手伝ってくれた両親の支えがあったからこそだと思っています。

第2回(2008年度)受賞者最終報告

第2回受賞者の方から、助成期間を終えて、研究環境や子育て環境がどのように変わったのかご報告いただきました。

研究継続で得た成果

吉良 智子 千葉大学大学院 人文社会科学研究所

2010年3月に提出した論文が認められ、博士号を授与されたことが最も大きな成果です。受賞前には、育児に専念するため大学院を退学することも考えていましたが、助成金により、子どもの養育環境も整い、研究を続けることができました。



合田 美穂 香港中文大学 歴史学科兼日本研究学科

研究の集大成ともいえる、発達障がい理解のための日中二ヶ国語によるハンドブックが香港で出版されることになりました。また、新たにセミナーの依頼などいただけるようになり、研究の成果を社会に還元することにも挑戦しています。



パイチャゼ スヴェトラナ 北海道大学
メディア・コミュニケーション研究院

長女が通っている小学校で、日本とロシアの食文化を比較する「出張授業」を行いました。子どもたちも、本やインターネットで調べながら積極的に授業に参加してくれました。今後も、こうした授業を続けていきたいと思っています。



育児と研究の両立を取り巻く環境について

足立 綾子 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科

子どもが小さく経済的にも精神的にも負担の大きな時期に、本助成を受けたことで、研究を継続することができました。今後も本プロジェクトによって、多くの女性研究者がその恩恵を受けられることを願っています。



稲葉 千賀 尚美学園大学 芸術情報学部 音楽表現学科

助成期間中に第二子を妊娠・出産しましたが、ご支援により、出産・育児と研究を両立できました。研究の面では昨年、音楽療法世界学会で研究成果を発表しました。私のライフワークとしたい研究の基盤作りをご支援いただけたこと、感謝しています。



馬場 わかな 東京外国語大学大学院 地域文化研究科

近年、女性研究者向けの助成制度は増えてきましたが、博士課程在籍者、とりわけ育児と研究の両立を目指す者を対象にした助成はまだ十分とは言えません。幸運にも私の場合は、本助成が大きな助けとなりました。心より感謝いたします。



研究継続の中での生活環境の変化について

田崎 直美 お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科研究院

夫の協力に加えて本助成を受けたことで、娘の育児環境が改善されたことが、生活環境の大きな変化です。経済的な負担はもとより、「研究協力者」である身内の負担を軽減することに役立つ点も、本助成の特徴だと思います。



野澤 暁子 名古屋大学 文学研究科

母親が研究活動に邁進する姿は、二人の子どもたちにとって大きな刺激となったようです。特にインドネシアでの異文化体験は強烈だったようで、そうした貴重な経験が子どもたちの心にしっかり根を下ろしてくれることを願っています。



中野 有希子 筑波大学大学院 人文社会科学研究所

母や義母が上京して子どもの面倒を見てくれる機会が増え、これまで以上に研究時間を確保できるようになりました。ドイツでの研究発表や、学会誌に投稿した論文の採用といった“実り”は、そうしたサポートによるものだと思います。



濱田 倫子 東京大学大学院 人文社会系研究科

受賞をきっかけにして先生方や仲間の応援も得られるようになり、研究において安定した成果を出すことができました。後輩の女性研究者のために道を切り拓く気持ちで、今後も研究を続けていきたいと思っています。



東日本大震災「緊急支援プログラム」のご紹介

東日本大震災「緊急支援プログラム」について

「未来を築く子育てプロジェクト」では、東日本大震災の発生を受け、被災した子どもたちや、子育て中の方たちのために支援活動を行う団体への緊急支援を目的とした、一時金助成（東日本大震災「緊急支援プログラム」）を、56団体を対象に実施しました。

【緊急支援プログラム概要】

1. 対象活動・団体

東日本大震災により被災した「子ども」のための活動、または被災した「子育て中の親等」のための活動を行う団体（より良い子育て環境づくりに取り組む団体であって、東日本大震災によりその活動の再開・継続に相当の困難性を有すると認められる団体も含む）

2. 団体の要件

子育て支援活動（より良い子育て環境づくりに資する活動）の実績がある「NPO法人またはこれに準ずる団体」もしくは「5人以上で活動している任意のボランティアグループ・団体等」

3. 助成額

1団体あたり20万円 総額1,120万円（合計56団体）

4. 対象経費

被災した「子ども」のための支援活動、または被災した「子育て中の親等」のための支援活動に要する経費

5. 募集期間

平成23年5月18日（水）～平成23年5月31日（火）

実行委員長からのメッセージ

未曾有の大被害をもたらした東日本大震災。この大変な状況の中で、私たちは、子どもたちが一日も早く笑顔を取り戻してほしい、そして子どもたちの笑顔が被災された方々の“明日への力”となってほしいと願いました。

この「緊急支援プログラム」は、被災者のために尽力するNPOやボランティアグループの方々を支援することによって、少しでも復興のお手伝いをしたいとの想いのもとに実施いたしました。

支援させていただいた56の団体のなかには、これまでの子育て支援の実績を生かした活動をする団体の他、先般の震災をきっかけに新たに誕生した団体もありました。そのいずれもが、本プログラム

の想いをしっかりと受け止めていただき、地域の事情を汲んだ独自の着眼点から、行政や企業では手の届きにくいところにまで目を配った活動をされていました。

徐々に求められる支援内容にも変化が見え始めています。しかし、依然として多くの支援が必要とされていることは紛れもない事実です。被災地支援が継続的に続けられるためにも、みなさんの活動を広く伝えてください。協力者を増やしていくことはたいへん重要なことだと思います。多くの仲間がつながることで、支援の輪が今以上に広がってほしいと願っています。

東日本大震災「緊急支援プログラム」助成対象団体 活動の様子

東日本大震災「緊急支援プログラム」において支援させていただいた56団体の中から、ここでは、2つの団体の活動の様子をご紹介します。

一般社団法人 東京都助産師会

助産師相互の協力と、助産専門職の水準の向上を図ることで、母子の健康・福祉の増進に貢献する、助産師の専門職能団体です。組織は47都道府県支部によって構成され、母子保健事業の実施や普及・啓発活動に取り組んでいます。



活動の様子 震災発生後、被災された方々に助産師会としてどんなサポートができるのか検討を重ねてきました。そして、心身に大きな負担や不安を抱える被災地の妊産婦さんに、「実家に里帰りするような気持ち」で東京の助産院で、安心して産前・産後を過ごしていただきたいという願いを込めて『東京里帰りプロジェクト』をスタートさせました。妊産婦さんのために住居を無償で提供してくれた方々や、支援物資を送ってくれた方々など、多くの協力によって効果的な支援ができたと思っています。

一方で、ご家族と離れて暮らすことで精神的につらい思いをされている妊産婦さんもいらっしゃいました。そこで、新たな取り組みとして、お母さんたち同士の交流会を始めました。参加者の方からは「同じ境遇の人たちと話せたことで気持ちが落ち着き、心の負担が軽くなった」との感想をいただいています。出産・産前産後の生活サポートに加えて、こうしたお母さん同士の交流のネットワーク作りなども、引き続きお手伝いしていきたいと思っています。

おどっつあんS

絵本の読み聞かせを通じて、地域の子どもたちとその家族の子育てを応援することを目的に設立。

書店、公民館、保育所などで「おはなし会」を開催するほか、育児や男女共同参画をテーマにしたイベントにも参加しています。



活動の様子 宮古市を拠点にして、子どもたちに絵本の読み聞かせを行ってきた私たちの元には、震災直後から、絵本の寄付が多く寄せられました。励ましのお手紙が同封されていることも多く、大変勇気づけられました。はじめのうちは、全国から集まった大量の本を整理し、避難所や保育施設に届けることで手一杯でしたが、現在は、絵本とともに手作り本棚も寄贈するなど、子どもたちが絵本を楽しむための環境作りにも力を注いでいます。また、宮古市中心だった活動範囲も徐々に広がっています。

最近、久慈市や大船渡市などにも足を延ばして、絵本の読み聞かせや、現地の子育て中のお父さんたちとの交流活動を行いました。さらには、これまであまり訪れることのできなかった内陸部に、絵本の読み聞かせの講師としてメンバーを派遣するなど、ネットワークの拡大にも努めています。このような、子どもたちをはじめとした地域の方々との交流や、そのお手伝いを通じて、被災者である私たち自身も誰かの力になることができると実感できたことは、大きな発見であり喜びでもありました。

第4回受賞者のご紹介 表彰式

第4回「未来を築く子育てプロジェクト」の表彰式および懇親会は、
2011年2月14日（月）、ホテルニューオータニにおいて開催されました。



受賞者と実行委員の記念写真



会場の隣に託児ルームを開設



お子さんも一緒に参加



懇親会

「未来を築く子育てプロジェクト」子育て支援活動の近況

受賞による、
反響の大きさに
驚いています

ぷろじえくとえん 鳥取県・西浦 公子

受賞で変わった環境 このたびの受賞を岩美町に報告しましたところ、町長や教育関係の方々から「すごい賞をいただいたのですね。おめでとう」といった祝福の言葉を数多くいただきました。また、活動の様子が町報やケーブルテレビで紹介されたことで「ぷろじえくとえん」の知名度も高まり、周囲の方々から声をかけていただく機会も増えました。今後も、親子のための活動を精力的に行っていきたいと思います。



「未来を築く子育てプロジェクト」女性研究者の近況

受賞をきっかけに、
研究に集中して
取り組める
環境が整いました

稲山 円 東京外国語大学大学院 地域文化研究科 博士後期課程

研究テーマ 現代イランにおける宗教と女性
— テヘランにおける宗教儀礼の現地調査から —

受賞で変わった環境 受賞をきっかけにして、休学していた大学に復学することができました。それまでは研究を辞めるべきか迷いながらの生活でしたが、今回の受賞により迷いが吹っ切れ、研究に集中できるようになりました。現在は、イランでの調査の結果を整理・分析し、学術誌に論文として投稿する準備を進めています。



崎原 千尋 ハワイ大学大学院 アメリカ研究学部 博士課程

研究テーマ アメリカ人女性と沖縄
— 近代沖縄と戦後沖縄を比較して —

受賞で変わった環境 妊娠中に夫が病気になり、あわててハワイから帰郷して3年。復学のためハワイを訪れた際の友人や先生方との再会は本当に感慨深く、多くの方の支えがあったからこそ、今の自分があるのだと改めて気づかされました。受賞を機に、研究者として再スタートを切れたことに感謝の気持ちでいっぱいです。現在は、家族や諸先輩方、地域のサポートを得て、更なる研究に向けて奮闘中です。

受賞を機に、
研究者として
再スタート
できました

